

# 近代英語協会第31回大会

## ——シンポジウム・研究発表——

日時：2014年6月28日（土）

会場：日本大学文理学部 百周年記念館2階 国際会議場

東京都世田谷区桜上水3-2 5-4 0

TEL 03-5317-9709 (英文学科事務室)

近代英語協会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-2 5-4 0

日本大学文理学部英文学科 保坂道雄研究室内

メールアドレス：hosaka@chs.nihon-u.ac.jp

協会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mea/index.html>

(電話: 03-5317-9709 会費振込口座 00810-9-5821)

「統語構造と線形順序 – 語順をめぐる」

- 司会：大沢 ふよう (法政大学教授)  
講師：時崎 久夫 (札幌大学教授)  
講師：大沢 ふよう (法政大学教授)  
講師：宮下 治政 (鶴見大学准教授)

シンポジウム趣意書

法政大学教授 大沢 ふよう

統語構造の基本的な骨格は普遍的な原理によって定まっているという考え方は一般的に広く受け入れられている。では自然言語に見られる多様性や通時的な言語変化をもたらすものは何なのかということが問題になってくる。類型論的に世界の言語が SOV と SVO という主要な2つの語順に大別されることや(Dryer 2011)、歴史的に英語を含む印欧語は SOV 語順から SVO 語順に変化したということはよく知られている事実である。言語の基本語順は常に主要部が補部に先行する VO 型であるという Kayne (1994) の分析に従えば、古英語や日本語のような主要部後置型言語は VO 語順に何らかの操作を加えることで派生されるということになる。

本シンポジウムは、歴史的及び類型論的観点から語順の変化を取り上げ、上記の先行研究を検証しつつ、変化を引き起こした要因を、普遍文法に内在する媒介変数の変化として、あるいは音韻との関連性など、様々な角度からの分析を提案する。

## 「語順と語強勢の変化 — OV から VO へ」

札幌大学教授 時崎久夫

語順と語強勢の位置が相関するという考えは、Bally (1944) のフランス語とゲルマン諸語の対照研究などで示されてきた。本発表では、*The World Atlas of Language Structures* (2013) のデータを分析し、語頭近くに強勢を持つ言語は主要部後行、語末近くに強勢を持つ言語は主要部先行の語順を持つことを示す。また、語順と語強勢の相関が諸言語の歴史変化にも見られることを指摘し、この相関は、統語構造の枝分かれ方向と要素の音韻的な結びつきの非対称性から導かれることを論じる。

この相関を基に、英語の動詞と目的語の語順などの変化が語強勢位置の変化と関係している可能性について論じる。具体的には、語頭から語末近くへの強勢位置の変化が OV から VO への変化を引き起こしたという仮説を提示し、妥当性を検討する。もし、これが正しいければ、統語変化は音韻と語彙的意味の変化に還元されるという Longobardi (2001) の Inertial Theory を支持することになる。

## 「英語史における名詞句内語順の変化 — 対称性から非対称性へ」

法政大学教授 大沢ふよう

古英語において名詞句内の要素の語順はかなりの自由度を示しているという見方に対し、DP が存在しすでに固定化が進んでいるという主張がある。後者では語順を決定する要因を問題にする余地はあまりないことになる。(Crisma 2013) この発表では主要部名詞に属格名詞などの修飾語句がつく複雑な名詞句の構成要素の語順の変化を取り上げ、言語には very symmetric (非常に対称的) から less symmetric (Jenkins 2000:163) へという変動がありうるのか検証する。具体的には古英語に存在した the king's wife of France のような split genitive (分離属格構文) が消滅し、古英語では不可能だった the king of France's wife のような group genitive (群属格構文) が中英語期に出現した事例を取り上げる。なぜ分離属格のような名詞句全体の統一性を損なう語順が許容されていたのか、それが中英語では不可能となり群属格構文が出現した理由を探る。古英語においては主要部との意味関係の深さが補部の句内での位置を決定する要因が働いていたが、

その段階から、具体的意味関係から自由な、機能範疇の発達した非対称的言語への変化として捉えられるのではないかという仮説を提案し検証する。

## 「英語史における人称代名詞目的語の語順変化 — 媒介変数値の変化の観点から」

鶴見大学准教授 宮下治政

生成文法理論において 30 年前に確立した普遍文法への原理と媒介変数によるアプローチは言語の歴史変化に対して新しい研究手法を切り開いたと Chomsky (2013: 38)は述べている。本発表では、目的語として機能する英語の人称代名詞の生起位置、すなわち語順の歴史的变化をこの研究手法に立脚して理論的に考察する。

現代英語では、人称代名詞目的語の節内での生起位置は基本語順では（否定辞に後続する）本動詞の直後に固定されている (e.g. *I do not know **him**.*)。これに対して初期の時代の英語では、その生起位置は現代英語とは異なり、比較的広範囲に亘ることが知られている。例えば古英語では、人称代名詞目的語は完全名詞句が出現できない位置に生起可能である。また初期近代英語では、人称代名詞目的語の生起位置は本動詞の直後に固定されつつあるが否定辞に先行し得る (e.g. *I know **him** not.* (*King Henry V*, III.vi.19))。このように英語史では、人称代名詞目的語の生起位置に関して段階的な通時的变化が見られるが、これらの変化は2つの媒介変数の値の変化に起因すると主張する。

司会 安田女子大学教授 中川 憲

## 1. 「ウルフの意識の流れ技法の分析 — 語り手による情報制限と間接話法に含まれる直接話法の要素」

大阪大谷大学研修生 浅香 加奈子

ウルフ (Virginia Woolf: 1882-1941) の作品である *Jacob's Room* (1922), *Mrs. Dalloway* (1925), *To the Lighthouse* (1927) は間接話法を中心とする三人称小説でありながら、語り手の存在を突出させずに登場人物の思考を直接話法とほぼ同じ効果で描くことを可能にしている。この発表では上記の三作品における話法に注目し語り手による情報提供の特徴について議論する。はじめに、それぞれの冒頭部分において語り手が全能性を発揮せず、情報制限をしており、それによって直接話法のような思考の表現を可能にしている点を議論する。次に s/he や one などの人称代名詞や過去時制の動詞に注目し、それらによって間接話法に直接話法の要素が加わっていることを指摘する。最後に間接話法と直接話法が混在していることを指摘し、その技法について考察する。

## 2. 「Shakespeare と Fletcher の合作における wh 関係詞 — 執筆分担の証拠としての可能性」

東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程 菊地 翔太

William Shakespeare と John Fletcher の合作であると考えられている二編の戯曲 *Henry VIII* と *The Two Noble Kinsmen* の authorship に関する研究は、これまで韻律・語彙・形態論等の視点から行われており、二人の作家の分担に関して様々な主張がなされてきた。数ある形態統語的ヴァリエーションの中でも関係詞の使用に着目した研究には Hope (1994) があるが、wh 関係詞の使用に関しては調査の余地が残されている。そこで本発表では、wh 関係詞の使用に焦点を当てることで、二人の作家の違いを明らかにし、二つの作品の執筆分担に関する新たな証拠を提示することを試みる。具体的には、両作家の歴史社会言語学的背景を考慮に入れながら、wh 関係詞の 100 行あたりの調整頻度、前置詞随伴 (e.g. in which) と前置詞残留 (e.g. which...in) の選択、the which や where-compounds (e.g. wherein) の使用等に注目する。

司会 茨城女子短期大学教授 内桶真二

## 1. 「英語動詞の過去分詞形(‘-ed’)における派生的意味変化 — concerned と involved の対比に基づく一考察」

青山学院大学非常勤講師 渡邊丈文

派生的意味変化の該当例として involved と concerned がある。involved の場合には、受動形 be involved + in /with NP における「～と関わっている」の意味から、主として限定用法（前置修飾）における「複雑な」への意味変化が生じている。一方、concerned の場合には、受動形 be concerned + PP において、前置詞の違いから「～と関わっている」(in / with + NP) と「～を心配している」(for / about + NP) の2方向の意味があり、後者の派生形における「不安そうな」への意味変化がある。本発表では、OED の用例検索を基に、両者の意味変化の過程と出現数に関する相違及びその理由を検討する。特に、concerned に関しては、意味変化はもちろん、限定用法、叙述用法などの用法別の統語的、意味的な史の変遷を具体例と共に提示する。

## 2. 「自動詞と共起する have 完了形の変遷」

日本大学非常勤講師 秋葉倫史

本発表では、自動詞と共起する完了構造について検討する。特に、自動詞を伴う初期の have 完了形に注目する。一般的に have 完了形は、‘have’ が本動詞として対格目的語をとる構造 (OE の ‘have + 目的語 + 過去分詞’ 構造) から発達したと考えられている。一方、本発表で扱う自動詞と生じる have 完了形は、目的語を伴わないため、‘have’ の助動詞化ならびに完了構造の確立を示すものであると考えられる。これらの構造の変遷について、通時的コーパスより各時代の用例を抜粋し検証する。have 完了形と共起する自動詞について分析し、また同時に be 完了形に伴う自動詞との関連も確認することで、have 完了形の発達状況について考察を行うことを目的とする。

司会 静岡大学名誉教授 服部 義弘

### 3. 「Hiatus Breaker の再分析 — 普遍的 CV 音節構造と最適性理論の観点から」

宮城教育大学教授 西原 哲雄

本発表では、(近代)英語から現代英語（日本語やギリシャ語なども含む）において見られる母音連続(Hiatus)の生起が、これらの言語において一般的に子音の挿入(英語の[r]音など)で阻止される結果に基づく音節構造について検討をする。このように母音連続の阻止の為、母音間に挿入される子音が生起する位置については、英語のような再音節化などによって (\*VV → VCV (子音挿入) → V.CV (再音節化))、ほぼすべての言語において普遍的で無標であると考えられる CV 音節構造が構築されるような傾向にある事を論証する。

また、これらの現象が、最適性理論(Optimality Theory) の基本概念である普遍的な制約の序列化によっても的確に説明が可能であることも指摘する。

## ■ 講演 17:00—18:00

---

司会 京都府立大学名誉教授 米倉 綽

### 1. 「近・現代英語期における焦点化副詞の用法の変遷 — just を中心に」

名古屋大学名誉教授 中野 弘三

英語の焦点化副詞のうち just は、類似の焦点化機能を持つ副詞 only, merely, exactly などと比べて、どれよりも多くの用法を持つ。現代英語の just は、‘exactly, precisely’の意の特定の用法(specificatory use)、‘only, merely’の意の限定的用法(restrictive use)、後続の語句の意味を強める強調的用法(emphatic use)、発話の内容(の一部)を軽視する話し手の心的態度を表す軽視的用法(depreciatory use)、発話の合間にはさみ込むフィラー(filler)としての用法など、その用法は非常に多様である。今回の講演では、just がどのような過程を経てこのように多様な用法を獲得したのかを、近・現代英語期の言語資料に基づいて検証する。また、just が、類語の only, merely, exactly などと異なり、単なる焦点化機能を超えた意味機能を発達させた理由を、just が持つ意味特性と用いられる文脈を考慮に入れた意味論的・語用論的観点から考察する。

